

児童期における遊びと社会性の発達との関連について

——学童保育の視点を加えて——

中 村 英 舟

1. 目的

本研究では児童期の子どもたちの遊びの実態調査を行い、学童保育に通う児童に視点をあて、それ以外の児童との相違について検討した。そしてその結果から、遊びと社会性との関連を検討し、多角的な視点から発達の考察を深めた。

2. 方法

2011年11月下旬に、大阪府内の公立小学校1～6年生（男子150名、女子166名）の合計316名を対象として質問紙調査法を行った。まず、その結果を基に遊びの実態を分析した。次に、遊びと社会性の関連を検討するために、杉村ほか（2007）が考案した児童生徒用ソーシャルスキル尺度（SSI-M）と、庄司（1994）が作成した社会的スキル尺度、及び、中田・塩見（1999）が作成した社会的スキル尺度を合わせて検討し、21項目の尺度を構成したものを用いた。さらに、学童保育に通っている、もしくは通っていた児童を「活動した経験がある」とし、通ったことがない児童を「活動した経験がない」として比較した。

3. 結果と考察

遊びの実態については現代の子どもたちの姿が浮き彫りとなった。例えば、「学童も行って、塾にも行って、遊んだ」という多数の回答からは、子どもたちは極めて多忙であり、その忙しい合間の中で「遊んでいる」ということが示唆された。つまり、「隙間」で遊んでいるのである。この結果からは、子どもはいつの時代も遊ぶ存在であるということが言える。また、2～3人のいわば小集団遊びをしていた児童が多いという点も特徴的であった。さらに、発達の観点からは、特に低学年では多様な遊びを行っていたという点、高学年では特に性差が顕著であったという点が明示された。次に、社会性と学童保育との関連については、高学年の「積極的主張」スキルが高かった。この結果からは、学童保育に通っているもしくは通っていた児童は、友だちを自分から誘ったり、嫌なことは嫌だと断ることができるスキルを身につけている傾向にあるということが示唆された。つまり、学童保育という集団の中で、埋もれることなく自分を表現するためには必要なスキルであるという点、実際にそのスキルを行う機会があるという点、身近にモデルがあるという点において獲得されたと考察できる。また、今回の研究においては、遊びと社会性についての明確な関連は見られなかった。遊びの形態、遊びのありかたが時代と共に変容していくように、社会性の定義を深めていく必要がある。以上の事を踏まえて、学童保育の場がもつ力を既成の概念ではない側面から捉えること、「遊び」が持ち備えているものをより明確にすることを今後の課題としたいと考えている。